

近世奈良における小型案内記 系譜化の試み

——『改正絵入南都名所記』研究序論——

安宅 望（立命館大学大学院文学研究科）

E-mail gr0465vr@ed.ritsumeit.ac.jp

要旨

この稿は17世紀の中頃から18世紀の後半に奈良で出版された小型案内記の系譜作成を試みた。それらは永禄10年（1567）に焼失した奈良の大仏及び大仏殿復興に歩調を合わせて出されたものである。これまで小型案内記の個別の紹介と書誌は明らかにされてきたが、それらがいかに関連し結びつくかの体系的な考察はされてこなかった。筆者は江戸時代前半期の小型案内記がどのような経過をたどりそれ以降幕末にかけてロングセラーとして定着した『改正絵入南都名所記』という奈良を代表する小型案内記に収斂していったかを明らかにした。また、小型案内記の本文を詳細に検討し、その特徴を明らかにしつつ系譜として図示した。

abstract

This essay attempted to create a genealogy of small travel guides published in Nara during the middle of the 17th century to the latter half of the 18th century. They were issued in step with the reconstruction of the Great Buddha and the Great Buddha Hall in Nara, which were burnt down in 1567. So far, individual introductions and bibliography of these small guides have been clarified, but no systematic consideration of how they relate and connect has been made. I clarified how small guidebooks of the previous Edo-era converged on Nara's representative small guidebook called "Kaisei e iri Nanto meishoki", which was established as a long-selling book from the end of the 18th century to the end of the Edo period. In addition, the text of small guides was examined in detail, and the characteristics were clarified and illustrated as a genealogy.

I はじめに

奈良にとって江戸時代とは、古代・中世から受け継がれてきた文化遺産を近代へ引き継ぐ橋渡しの時期と言えるだろう。同時に、個々の文化遺産についてはそれが誕生してから連綿と紡がれてきた縁起・伝説の類が最も重層を為して存在した時でもある。伝説が事実と信じられ、仏教と神道が複雑に融合した江戸時代の奈良がどんな風景であったか。奈良に住んでいた人々は、神社仏閣についてどのように考えていたのだろうか。遠路はるばる奈良を訪れた人々はどのような思いで奈良の文化遺産を見たのだろうか。江戸時代の人々の視線で奈良を見るとどのような奈良が現れるか、筆者の大きな興

味はそこにある。

現在の奈良市内に江戸時代の奈良を偲ばせる風景は見つけにくい。そこで江戸時代の奈良に光を当てる方法として、筆者は江戸時代に奈良で出版された名所案内記を取り上げることにした。南都と言われた奈良を紹介する地誌・名所案内記の類は17世紀の中頃から出版され始め、東大寺復興の機運が高まった17世紀の末頃から数種類の名所案内記が出版された。そして江戸時代を通して版を改めながら出版され続けた。

その中で筆者が注目し取り上げるのは『改正絵入南都名所記』という名所案内記である（図1・2）。21丁の仮綴じの小冊子である。この名所案内記は東大寺の境内に店を持っていた絵図屋庄八という版元が18世紀の中頃から出版してきたもので、幕

末まで継続的に版を重ねた。わずかな金額で贖うこ

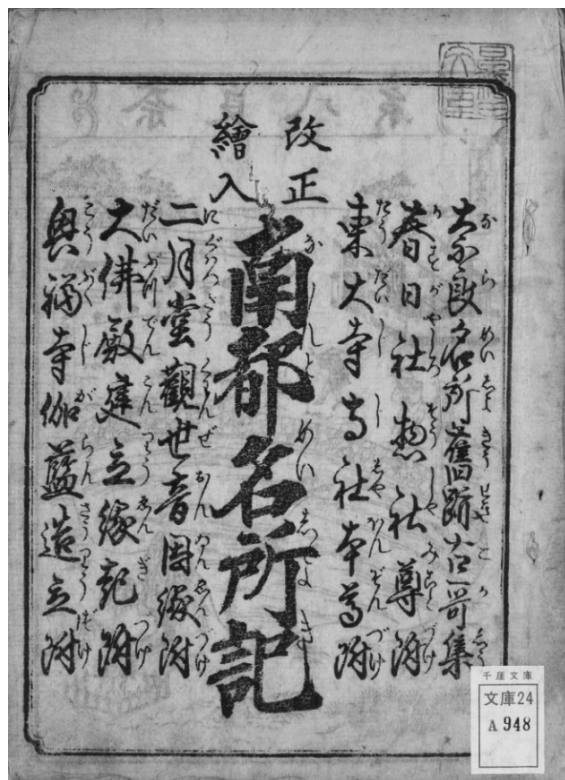


図1 改正絵入南都名所記 安永三年版 表紙 早稲田大学図書館

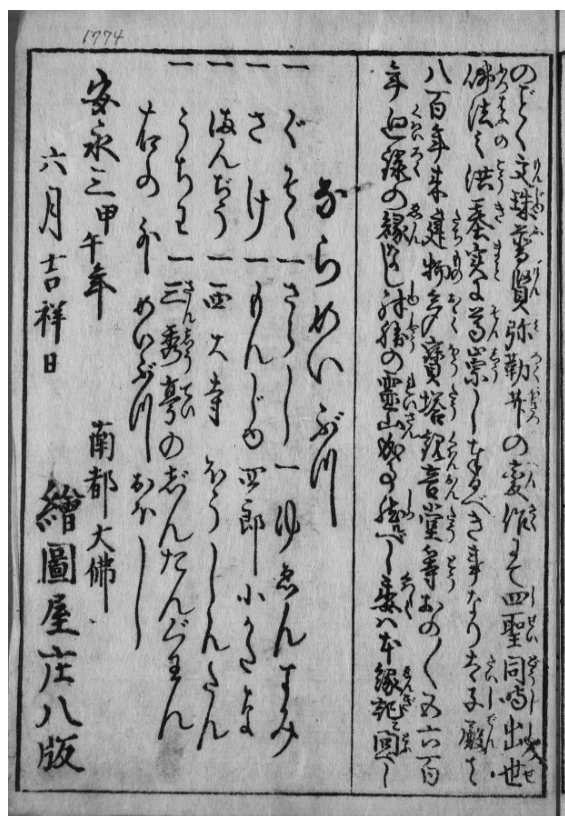


図2 改正絵入南都名所記 安永三年版 刊記 早稲田大学図書館

とができ、その内容は奈良の名所を春日社・東大寺・興福寺に絞り、その縁起を中心に名所の由来や逸話などを6枚の挿絵とともに紹介するものである。この小冊子は同じ絵図屋庄八が出版した簡便な絵地図「奈良名所絵図」（「ならめいしよえづ」と平仮名で表記されて出版されたこともある）とともに江戸期後半のロングセラーであった。

この稿では17世紀の終わりにいくつか出版されてきた名所案内記を紹介し最終的に『改正絵入南都名所記』に収斂されていくその過程を具体的に示し系譜図にまとめてみたいと考えている。

II 先行研究の紹介

まず先行研究によって奈良の名所案内記がどのように論じられ解明すべき問題点があったかを整理したいと思う。特に『改正絵入南都名所記』に関連するものを中心に述べる。

山近博義は「近世奈良の都市図と案内記類」¹⁾において水江蓮子による近世前期の案内記類の四つの分類²⁾を受けて、近世前期の京都の地誌・案内記の分類を行った。その際、水江の分類でいうところの第3種（物語性の後退した仮名草子）・第4種（第3種以降に出版された実用性の強いもの）に再検討を加え、名所記・町鑑・節用集的地誌・名所図会・小型案内記の五分類を提唱した。そしてその5分類を奈良大和の地誌や案内記に当てはめ分類を行った。古くから名が知られた『南都名所集』（延宝3年1675）や『奈良名所八重桜』（延宝6年1678）は名所記に分類される。

これから論ずる『大和名所記』『南都名所道筋記』『南都名所記』『改正絵入南都名所記』等は小型案内記の範疇に入り数種類出版された。山近はこれらの小型案内記が江戸中期から幕末まで出版され続けたこと、都市図が進化したことは、それだけ需要があり、奈良観光が廃れなかったことを示していると述べている。山近はその需要を「観光情報」ととらえている。

山田浩之は「近世大和の参詣文化」³⁾のむすびで案内記の二つの役割について述べている。すな

わち「一つは道案内・ガイドブックとして、もう一つは土産物として」であり「予備知識としての案内記と土産話のための案内記」があったと考える。絵図屋の案内記は「土産物としての性格が強い」と結論付けている。山近、山田両氏の論は小型案内記の位置づけを明確に示していると筆者も考えている。

吉海直人は絵図屋庄八の出版物を集中的に取り上げ、絵図屋庄八から近世奈良の出版文化を概観しようと試みた。就中、数多くの版本の影印を公にした。吉海は一連の論考によって絵図屋（筒井家）の出版活動について概観し、それぞれの小型案内記の書誌を明らかにした⁴⁾。一番の仕事は〈絵図屋関係出版物一覧〉を制作したことである。貞享版『南都名所道筋記』から昭和16年刊の『奈良名勝全図』（筒井錦華堂名義）まで96点を網羅し、後に天理参考館に所蔵された絵図屋（筒井家）出版の絵図・案内記等を増補し44点を加えた⁵⁾。現時点ではこの吉海の目録が決定版と言ってよい内容となっている。しかし、吉海は刊記の無い『南都名所記』『大和名所記』と、その後の『改正絵入南都名所記』とのそれぞれの関係性については十分に考察しているとは言いがたく、書誌的な紹介に留まっている。

以上のように、奈良の小型案内記についての先行研究は、出版物の書誌的な整理⁶⁾を行い、出版元絵図屋に焦点が移り⁷⁾、出版物の調査から吉海が絵図屋の出版物一覧表を完成させた。しかし、当初絵図屋の出版物とされていた初期の小型案内記について出版者を特定することは未だ困難である。いずれにしても小型案内記の本文に踏み込み何が書かれているか、それぞれの冊子にどのような差異があるのか、記事は何を根拠に書かれているのか、といったことはまだ本格的に検討されていない。

この論考によって明らかにしたいことは、『改正絵入南都名所記』を奈良の小型案内記の完成形ととらえ、それに至るまでの小型案内記を系譜化して位置付けることである。どのような過程を経て江戸後期のロングセラーである『改正絵入南都名所記』に収斂していったかを明らかにする。それには各冊子の本文の精査が不可欠である。次節では各冊子の本文を細かく見ながら相互の関係性を考察してい

く。

III 小型案内記の系譜化図

先学の研究でも吉海が絵図屋に関わる出版物の一覧表を作成し、時系列に並べることはやってきたが、内容に踏み込んでそれぞれの冊子がどのような関係で結ばれているかを明らかにするまでには至っていない。これまでの研究で点として浮かび上がってきた小型案内記に、さらに筆者が新たに発見した新資料を加えて改めて線で結び関係性を記述する。

i 『南都名所記』の始まり（新資料の紹介）

筆者がこの稿で紹介する『南都名所記』は寛文7年(1667)の年紀が記される写本である。巻末の刊記に「貞享元年八月十五日南都樽井町」とある『南都名所道筋記』よりもさらに17年古い。その内容を見ると『南都名所道筋記』の編集に何らかのアイデアを提供したようにも思えるので、その存在は無視できない⁸⁾。管見の限りこの写本を取り上げ言及した研究者はいないようである。まず書誌を記す。

外題は『南都名所記』で表紙左上に墨書で書かれる。所蔵は国会図書館で画像データも公開されている⁹⁾。原本を調査すると冊子自体はかなり疲れが見え、小さな虫損の穴が無数にある。虫損により文字の判読が難しい箇所もある。また表紙左半分は水をくぐったようなシミがあり汚れている。料紙は楮紙である。寸法は縦24.0cm、横16.9cm、丁数は表紙を除き38丁である。本文は9行書きだが、一部10行、11行の丁もある。内題は無い。見返しの裏に旧所蔵者である高木利太の朱書きの書き込みがある(図3)。序文第1丁オには蔵書印が三か所押されている。右上に「高木家蔵」の角印、中央上に「国立図書館蔵」の角印、中央下に日付印の丸印。日付印は「昭和二十三年」と辛うじて読める。国会図書館の台帳によると昭和23年3月18日に受け入れたことになっている。見返しの高木の書き込みは写本についての重要な情報が含まれているの



図3 写本南都名所記 見返し裏 国会図書館

でここに引用する。

本書享保十五年ノ写本ナレド原本ノ記文ハ寛文七年也永禄年間ニ炎上シタル大仏殿今ハ礎石ノアトバカリニテ取立ツル人モナシアリ本書ノ著者ハ奈良ノ人ナルベシ

大正十五年六月五日 高木利太
本書ノ序文ニ洛陽ノ名所旧跡ヲカキ集テ京童ト名付タル双紙アリ是モ其童ニヒトシキカナレバ幼ムツヒトヤ云ハントアリ故ニ題号ヲ南都幼ナムツヒト称スベキナラン奈良ノ名所記トシテハ延宝年間ノ南都名所集奈良八重桜ヨリ以前ノモノナリ書中春日祭礼ノ行列次第第(ママ)シク記セリ

本文では経過年数を数えるときの基準をすべて寛

文7年としている。このことにより本文の執筆は寛文7年以後数年の間と考えられる。巻末に「享保十五年庚戌歳 三月十八日 三宅貫勝写」とあり、写本の制作は享保15年(1730)である。三宅貫勝という人物については不詳である。

本文を精査すると、この写本の内容は、興福寺・春日社・東大寺の三か所の名所を中心に記述し巻末近くに空海寺、五劫院、般若寺、祇園社、雲居坂、轟橋、奈良町の項が追加されている。寺社は東大寺の北方面にある東大寺所縁のものである。雲居坂は奈良八景の第六、轟橋は同じく第五として紹介されている。この写本は出版された本を写したものではなく、出版を企図した草稿か下書きを写したもののようである。

『京童』という名前が序文に出てくるが、『京童』は明暦4年(1658)に中川喜雲によって書かれた仮

名草子・地誌である。近世初期に刊行された地誌・名所案内記の先鞭をつけたもので、賢い少年に案内させて京を見物する、という形式をとり、京都を中心に山城国一円にわたる87ヵ所の名所を挿絵入りで記している。この『南都名所記』は「ヲサナムスヒ」と書いてあるが、本文に童子は登場せず、そのような趣向は採用していない。一方、最初に項目を立てて、その後に記事を書いていること、古歌や俳句を多数挿入していること、神社仏閣ばかりでなく自然の景物（飛火野・春日野・若草山等）も名所に加えていることは『京童』と同じである。

後の名所記（小型案内記）の先駆けになる特徴をまとめると、

- ①南都の名所を興福寺・春日社・東大寺の3つに絞った最も古い名所記であり全38丁と比較的コンパクトな丁数でまとめられていること。
- ②これまでの奈良の地誌『南北二京霊地集』（万治2年1659）『和州寺社記』（寛文6年1666）ともに神社仏閣を網羅的に紹介するだけであったが、それに限らず春日野・若草山といった自然の名所も併せて紹介していること。
- ③最初に項目を記し、その後に本文を書く、名所にちなんだ古歌・俳句を挿入するという名所記の基本の形を示していること。
- ④全て一筆書きになるような道筋で名所を紹介している訳ではないが、それぞれ回る順序を多少意識した配列で名所を紹介していること。

以上の4点をあげることができる。『京童』に呼応する形で小型案内記の原型ともいえるべき本が書かれていたのである。出版までは至らなかったが草稿が残ったのではないだろうか。

この写本『南都名所記』を奈良における山近の定義した第5分類（小型案内記）の原型と位置づけ『南都名所道筋記』の前に置くことにする。もちろん、『南都名所道筋記』の著者は不詳であり寛文7年の『南都名所記』を見た確証は無いが、前述の4つの特徴を改良した『南都名所道筋記』がある

以上、やはり原本と何等かの接触があったと考えたい。

ii 『南都名所道筋記』と元禄版『南都名所記』の検討

次に『南都名所道筋記』とそれに続く元禄15年（1702）頃版『南都名所記』との関係について検討する。比較に使う『南都名所道筋記』は早稲田大学図書館千崖文庫蔵のもので、書誌・画像データが公開されている¹⁰⁾。元禄15年版『南都名所記』は吉海が発表した解題と影印を参照する¹¹⁾。以下『道筋記』及び元禄15版と表記する。

前節で紹介した写本『南都名所記』の編集上のアイデアを『道筋記』が取り入れたことは既に関わったが、本文の文章をそのまま引き写したと思われる箇所はほとんど無い。『道筋記』の文章はオリジナルなものである。南都めぐりの出発点も猿沢池から始まっている。

『道筋記』の特徴は、先に挙げた寛文7年『南都名所記』の4つの特徴を基本にして、改良を加えた部分である。

- ①南都名所を春日社・東大寺・興福寺に絞り、その名所を紹介する最初に出版された小型案内記であること。
- ②外題の通り名所をたどる道筋が意識されほとんど一筆書きで南都を回れるような工夫がされていること。

以上の2点が挙げられる。挿絵は無い。また経過年数の起点を貞享元年としている。

一方、元禄15版は仮綴じの全11丁の冊子で刊記は無い。表紙には「南都名所記」の外題に加え

奈良名処旧跡古歌付
春日社惣社尊付
東大寺寺社本尊付
二月堂観世音因縁付
大仏殿建立縁起付
興福寺伽藍造立付

の目録が直摺りで書かれている(図4)。表紙の裏には「奈良八景」と題された挿絵が入り「うねめのみや」「きぬかけ柳」「さるさかの池」の三つが無地の背景の中に描かれる(図5)。小型案内記に挿絵らしい挿絵が入ったのはこれが初めてである。経過年数の起点は元禄15年である。

吉海が『道筋記』の解題と影印を発表した論考には、この元禄15版との比較がなされている。冒頭の部分を比較して「その本文・順序・レイアウトなどほとんど一致していることがわかる」と書き、その他の部分の比較も含めて「『南都名所記』は『南都名所道筋記』の改題本と言っても過言ではあるまい」と結論付けている¹²⁾。そして書肆は特定できないものの両書は同一書肆の出版物である可能性が高いと述べている。

両書を詳しく比べてみると確かにレイアウト・記述の順序は等しいところが多いが、元禄15版なりの編集もかなり見られ、単に改題本と言い切ってしまうには多少違和感がある。小型案内記の系譜を作成するには両書の違いを明確にしておくことも必要である。

元禄15版の最大の編集ポイントは記述の簡略化

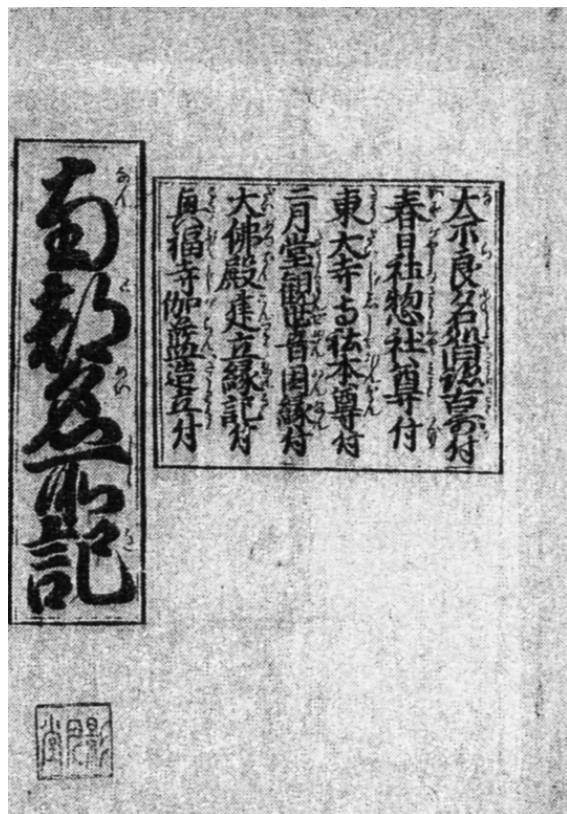


図4 南都名所記 表紙 元禄15年頃版 影月堂



図5 南都名所記 表紙裏 元禄15年頃版 影月堂

による丁数の削減である。『道筋記』は11行書きの19丁で約418行、元禄15版は13行書きが5丁半、後半は15行書きが3丁半、16行書きが1丁半で約300行弱である。行数だけで言えば元禄15版は『道筋記』の約七掛けの分量に圧縮されている。それでいて書かれている項目数はほぼ同じである。その分字が小さく行間を詰めて書かれており、特に後半は窮屈である。

『道筋記』との比較で元禄15版の編集の特徴について検討する。

- ①分量を圧縮するために細かい省略が多数みられる
 - a 猿沢池、鹿道、左良気明神、手向山のそれぞれの項で『道筋記』に書かれた古歌・俳句を割愛している。
 - b 東大寺では念仏堂の項目中の仏像などの記述6行分、宜寸川・氷室社・拍子神の項4行分が省かれている。興福寺でも経過年数(〇〇から元禄十五迄〇〇年)を省くなど文意を損ねない程度の省略が数多

く見られる。また『道筋記』には必ず書かれていた古歌の出典もほとんど割愛されている。

②引用する歌の差し替えがある。

春日社大鳥居の項

『道筋記』榊葉にゆふして付て打はらふ身
にはけがれの雲霧もなし

元禄15版 ちはや振神の鳥居をとをりて
は万のつみもきへうせにけり

春日社御手洗川の項

『道筋記』春日野の松のかれずはみたらし
の川のながれて絶じとぞおもふ

元禄15版 御手洗や清きながれに御祓
して心もすめる神の御前に

③時代に応じた改変がある。

貞享の『道筋記』と元禄15版は18年の間隔があるが、その間の変化が記事に反映されている。

a 東大寺八幡宮は『道筋記』の時はまだ再建前で「社は寛永十九年に焼失しそののち黒木の御殿へ勧請す」となっているが、元禄15版ではすでに再建なって「仁徳天王大宮中応神天王右姫御神左神功皇后」とのみ書かれる。

b 東大寺大仏殿の再建前の『道筋記』には勧進所の記事が無いが、再建途上の元禄15版には勧進所の項が新設され五劫思惟の阿弥陀如来、聖武天皇・龍松院公慶上人の御影が安置され、不断念仏が行われていることが書かれる。

c 東南院の項では元禄14年に完成した徳川家康像を安置するために新設された東照宮について以下のように付記されている。「今龍松院上人東南院御造営有当聖権現奉遷昼夜勤行不絶」。当聖権現とは東照権現のことである。

④その他の改変 名前、数字や日付等の違い
例:『道筋記』大仏殿の項「鑄師は陳和桂日本草部是助佛師は康慶運慶定覚快慶」

元禄15版 大仏殿の項「鑄師ハチンクわけ
い日本草部これ助仏師は康慶運慶」
『道筋記』興福寺 知行式万千百十九石

五斗余

元禄15版 興福寺 知行二万五千石余

以上4つの視点で両書の違いを明らかにした。いずれにしても元禄15版の著者は丁数を圧縮することに相当気を配っており、薄い丁数で最大限の情報を盛り込んだ案内記を早急に出版する、という背景があったことが推察される。

元禄15年前後は大仏殿再建事業が活発に動いた時である。元禄5年に再興なった大仏の開眼供養が行われ、元禄10年に大仏殿の柱立てが始まった。元禄14年から大仏殿再建事業が「公儀御普請」となり奉加金は奈良奉行所に集められ再建が本格化する。また同年徳川家康像が完成し、東南院に造営された東照宮に安置された。その3年後、宝永元年は重源上人五百年忌にあたり盛大な法要が営まれ、俊乗堂も再建になった¹³⁾。東大寺復活が本格化しさまざまな人々が奈良に行き交い活気に満ちたことは想像に難くない、そこで簡便な南都の案内記の需要が急速に高まったのだろう。その時代の中でやや拙速な形でつくられたのがこの『南都名所記』ではないだろうか。

iii 宝永5年頃版『南都名所記』の検討

元禄15版の後に出版されたのが宝永5年(1708)頃版の『南都名所記』である。わずか6年後に出たものであるが注目すべき点がいくつかあり、ここで改めてその内容を検討する。参照するのは吉海による改題と影印である¹⁴⁾。以下宝永5版と記述する。

宝永5版は15行12丁で行数は最終丁迄統一されており、元禄15版と比べ整ったレイアウトになっている。

表紙や表紙裏の挿絵は元禄15版と全く同じである。刊記は無い。内容については、吉海は論考の中で宝永5版を元禄15版の異版として内容は「大差なさそう」と述べている¹⁵⁾。しかし精査すると後の展開に関連を持った部分があり、元禄15版とはかなり異なった印象を与えるものとなっている。

元禄15版が拙速に出版されたものではないか、と前に述べたが、宝永5版は内容的には元禄15版

の改版というよりも『道筋記』の改版といった側面が強い。というのは元禄15版で割愛された部分が宝永5版に復活しているところが多々あるからである。一方、引用されている古歌は元禄15版と同じである。宝永5版の編者は双方を参照していると考えられる。例えば、東大寺の項で見ると、新造屋は『道筋記』と同文である。一方護摩堂は元禄15版と同じである。法華堂は『道筋記』と元禄15版とを折衷させた記述であり二月堂は『道筋記』とはほぼ同文で元禄15版では省かれた部分が復活している。三昧堂はどちらも違うオリジナルの文で良弁杉は『道筋記』と同文、といったように基本的には『道筋記』を参照しているが元禄15版も適宜参照していることがわかる。

特に宝永5版の特徴は東大寺に公慶上人の大仏殿再興の事蹟と入滅について追記されていることと聖武天皇の伝記を追記していることである。公慶上人の記述はその後の『改正絵入南都名所記』にもほぼそのまま引き継がれるが、聖武天皇の伝記については宝永5版のみに見られる。その部分を引用する。

和銅七年甲子（ママ）六月立皇太子になる神
亀元年甲子二月四日そくい天平勝宝元年己丑
七月二日禅位同十四日出家法諱勝満同八年
丙申五月二日崩御年五十六才佐保山のみささ
ぎにはうむる大仏々十三丁いぬいの方松の
おいしげる山をいふ

和銅7年は甲寅である。興福寺の記述は『道筋記』そのままである。巻末には元興寺、般若寺について書かれるが、前者は『道筋記』、後者は元禄15版と同文である。元禄15版との比較で言えば、全体にレイアウトが整っていること。内容は『道筋記』を基に元禄15版も参照し、新たに公慶上人の事蹟、聖武天皇の伝記を追記した意欲的な冊子と言える。急増する需要に対応するためにやや荒っぽい編集で世に出した元禄15版を落ち着いてもう一度きちんと編集し直して出版したのが宝永5版と考えられる。その意味で『南都名所記』の一つの完成形と位置付けられる。

iv 井筒屋庄八版『大和名所記』の前半部の検討

明和6年(1769)井筒屋庄八版の『大和名所記』は全36丁で出版された小型案内記の中では最大の丁数である。表紙には「大和名所記 外ニ無類」という貼題箋がある(図6)。前半21丁が南都三名所、般若寺・元興寺の記述で、最後に奈良名物を列記して終わる。後半15丁が大和国の名所の紹介である。刊記は「明和六年孟春正月 和州奈良大仏井筒屋庄八版」とある。絵図屋の前身井筒屋の出版物であり、『改正絵入南都名所記』につながっていく小型案内記である。後半部の大和国名所の記述については、次節で先行する他の『大和名所記』との比較を行う。以下明和6版と表記する。

この冊子は絵図屋の前身である井筒屋が刊記に「奈良大仏井筒屋庄八版」と明記して出版した初めての小型案内記である。前述の宝永5版からこの明和6版まで、その間約60年余あるが、宝永5版をそのまま内容を変えずに再版していたか、未だ知られていない小型案内記が出ていたか、現段階では不詳である。



図6 明和6版 大和名所記 表紙 早稲田大学図書館

この明和6版の前半部の南都三名所の記述を検討する。この21丁は12行で統一されており、これまでで最も平仮名を多用し、漢字の使用はごく易しい文字だけである。そのため、字数が増えて『道筋記』を含め『南都名所記』の中では最も多い丁数となっている。項目の始まりは▲で表すが、改行せずにそのまま続ける。これは宝永5版でも見られたが更に徹底している。そしてこのレイアウトは『改正絵入南都名所記』に引き継がれる。

この明和6版は項目・順序・古歌・文章は宝永5版をほぼそのまま取り入れて書かれている。その中でも『改正絵入南都名所記』につながる改変がいくつか見られる。まず、猿沢池では「なんとさる沢の池はかすが明神の御かがみの池なり」の一文が挿入される。また興福寺の南大門の項を1丁目の楊貴妃桜の次に移した。最も大きな改変は東大寺大仏殿の項である。「金銅十六丈るしやなぶつ」の一文から始まり、大仏・台座・光背・大仏殿・回廊の寸法と大きさが細かく書かれる。大仏再興から77年、大仏殿再建から60年が経っているが、再興なった大仏と大仏殿の全容がようやく明らかになった感がある。この記事で17行が挿入される。また、松永弾正による大仏殿炎上の永禄10年から明和6年までの年数を「五百六十五年」としている。実際は202年で明らかな間違いである。一方、宝永5版にあった聖武天皇の伝記は割愛される。興福寺の各項目は宝永5版をほとんどそのまま平仮名に直しただけである。最後に興福寺の寺領について追記がある。興福寺と春日社の領高の配分について書かれるが、このようなことも奈良を訪れる人々の関心事であったのだろう。後に阿闍寺、般若寺、元興寺について書かれる。阿闍寺は明和6版で初めて登場する。般若寺、元興寺の記事は宝永5版と同文である。前半部最終丁は「ならのめいぶつ」として

一ぐそく 一さらし 一ゆゑんすみ
一さけ 一もんじゆ四郎小刀
一まんぢう一西大寺ほうしんたん
一三秀亭のじんたんぐわん
右の外めいぶつおほし

と書かれている。この名物紹介はこれまでの『南都

名所記』には無い初めての試みである。

以上の改変はその後絵図屋庄八と名を変えて出版される『改正絵入南都名所記』にそのまま引き継がれる。

明和6版の南都部分は宝永5版の『南都名所記』を全面的に採用しながら、東大寺大仏に関する記述を大幅に増やし、興福寺の寺領について詳しく触れ、最後に阿闍寺を付加したものである。ここまで来ると『改正絵入南都名所記』がほとんど見えてくるのである。

v 『大和名所記』各版の系譜化検討

小型案内記では大和国全体の名所を網羅した『大和名所記』にも触れないわけにはいかない。ここで取り上げるのは『大和名所記』という外題の小型案内記で、比較可能な6種類の画像が公開されている。

取り上げる『大和名所記』を紹介する。

- ①元禄8年頃出版 影月堂蔵、以降元禄8Aと略記する
- ②元禄8年頃出版 早稲田大学図書館蔵、以降元禄8Bと略記する
- ③元禄8年頃出版 影月堂蔵、以降元禄8Cと略記する
- ④宝永5年頃出版 早稲田大学図書館蔵、以降宝永5版と略記する
- ⑤延享4年山村版 早稲田大学図書館蔵、以降延享4版と略記する
- ⑥明和6年井筒屋版 早稲田大学図書館蔵、以降明和6版と略記する

このうち①③⑤は吉海が論考の中で解題・影印を公にしている。⑤については早稲田大学図書館蔵本を使用した。早稲田大学図書館蔵本の書誌・画像データは公開されている¹⁶⁾。

各版において出版年代を記した刊記があるのは⑥明和6版のみで、他は経過年数の起点をそれぞれ元禄8年、宝永5年、延享4年に置いているため、その頃の出版と判断する。元禄8各版と宝永5版には刊記は無い。⑤延享4版には巻末に「南都

陰陽町山村重三郎板」の刊記がある。明和6版については前節に既述した。

まず元禄8A・B・Cについて、元禄8B・Cは同じ版であるが元禄8Bは最終丁（大名一覧）が欠落している。元禄8Aは表紙とも全10丁で元禄Cは表紙とも全8丁である。しかし最終丁の大名一覧は元禄8Aと同じ内容である。つまり元禄8AとCは同時期に出版されたことに疑いはない。

元禄8Aと元禄8B・Cは1丁～3丁までは同版であるが4丁～6丁は別版となる。元禄8B・Cは4丁から行間がつまり窮屈になる。元禄8Aの4丁表裏分の記述を元禄8B・Cでは4丁表にほぼ詰め込んでいる。掲載されている項目数は同じで元禄Aは1丁から8丁に、元禄8B・Cは1丁から6丁に65項目を掲載している。同じ元禄8年に出版されたが、どちらがより早く出版されたかを考えると、同内容で丁数を圧縮した元禄8B・Cが後追いで出たと考えられる。

次に宝永5版を元禄8A、8B・Cと比較してみる。元禄8Aは本文12行、元禄8B・Cは13行、宝永5版は15行である。宝永5版の特徴は行数が多い分情報が多いことである。本文の記述は元禄8Aとほぼ同文で書かれている。名所の場所の記述、例えば「奈良より〇丁南の方にあり」という文が元禄8B・Cは字数の関係で省略されることが多いが、宝永5版は元禄8A同様にほぼすべてに記述されている。元禄8Aは字数の関係で体言止めが多用されるが、宝永5版は「～なり」「～あり」という文末が多い。さらに平仮名を多用し丁寧な記述で読みやすくなっている。大安寺の項で比較する。

元禄8A 7丁オ 11行目

大安寺 退転のところがなれとも七大寺の跡なる故に書加る本尊観世音鎮守八幡宮聖徳太子の御建立の所むかし八十町四方の大伽藍所宝物等今に有奈良より十丁余坤の方

元禄8B・C 7丁オ 4行目

大安寺 いにしへ十町四方聖徳太子御建立大からん所也本尊くはんおん真言宗寺領五拾石ちんしゅ八まん宮其外宝物今ニ有
宝永5版 6丁ウ 9行目

大安寺は退転の所なれ共七大寺のあとなるゆへ書加る本尊観世音ちんじゅ八幡宮聖徳太子の御建立の所むかしは十丁四方の大からん所宝物等今にありならより十丁余ひつしさるの方なり

また宝永5版に元禄8A、8B・Cにはない追加項目が一か所あり、4丁オ 1行目「飛鳥神社」が挿入される。宝永5版は元禄8Aの簡潔な記述を踏まえつつも名所の場所の記述や文末の処理に改良を加え、読みやすくした。その意味で元禄8Aの改良版と位置付けられる。

宝永5版から39年後に出た延享4版（山村版）について検討する。延享4版の特徴はほぼ元禄8B・Cをベースにして一部項目を追加していることである。直近にでた宝永5版を改版したのではなく元禄8年の圧縮版（B・C）を下敷きにして出版されたのである。丁数も元禄8B・Cと同じで、行数も4丁表まで12行、その裏から最後まで13行というレイアウトも同じである。文章もこまかい異同は若干あるがほぼ同じである。ただ追加項目が三か所ある。

3丁オ ▲元興寺の項を2行追加

4丁ウ ▲般若山宝山寺の項を1行追加。

7丁オ ▲三井寺の項を1行追加。

全体のレイアウトをやりくりして三項目を追加してもトータルの行数はほぼ同じである。宝永5版に追加された「飛鳥神社」は延享4版には入っていない。山村重三郎がどのような経緯で元禄8B・Cを参照して延享4版を出版したかの手掛かりは今の所無い。

最後に明和6版後半部を検討する。前述した通り絵図屋の前身である井筒屋名義で明和6年に出した『大和名所記』は前半部に宝永5版『南都名所記』を下敷きにして南都三名所、阿闍寺・般若寺・元興寺について記し、後半に大和国全体について直前にでた山村重三郎による延享4版ではなく、宝永5版『大和名所記』を下敷きにして記す。つまり井筒屋は主に宝永5版の『南都名所記』・『大和名所記』両方を参照し、それを合体させて明和6版『大和名所記』を制作したと考えられる。

宝永5年頃にでた2つの名所記についてどのような関係にあるのかは、刊記等が無いのではっきりは

わからない。しかし、項目を表わす記号が『南都名所記』は▲で『大和名所記』は○であるので、双方は別々に編集され出版されたと考えられる。宝永5版は本文15行6丁、明和6版は12行11丁である。宝永5版の1丁目にある東大寺・春日社・興福寺の項24行は省略している。つまり宝永5版の15行5丁分の内容を明和6版では12行11丁で書き記している。明和6版は平仮名を多用し、難しい漢字の使用を避けているので、その分行数丁数が増えているのである。宝永5版に追加された項目(飛鳥神社)明和6版に引き継がれているが、延享4版に追加された項目(般若山宝山寺・三井寺)は無い。阿闍寺・般若寺・元興寺は前半の南都部に掲載されている。

明和6版は全巻を通して掲載する項目は主に宝永5版の『南都名所記』・『大和名所記』を参照し、さらに大和国に関する記事は延享4版も適宜参照して制作された。しかしそればかりではなく、新規に記事を増やし内容を充実させている。

附録的に書かれた記事は、「南都七大寺」「大和一国御給人御居城并御蔵屋敷付」、紀州高山、和歌の浦の紹介、「伊勢宮めぐりの次第」「伊勢より下向ならへのみち」など周辺情報も豊富である。外題に「外ニ無類」とある所以である。

IV まとめ

『改正絵入南都名所記』につながる小型案内記がどのように変遷してきたかを概観した。その系譜図は図7を参照して欲しい。体裁的にも内容的にも整ったものが出来たのは『南都名所記』、『大和名所記』ともに宝永5版である。これは偶然の一致ではなく、それを意図して行った書肆があったはずであるが、今のところ特定する手掛かりは無い。延享4年の山村重三郎版と明和6年の井筒屋庄八版が具体的な版元の手掛かりであるが、山村重三郎も名前が伝わっているだけでどのような活躍をしたのかは明らかではない。しかし、山村重三郎が制作した『大和名所記』は言わば即席版というべき元禄8B・Cを元に編集されているので内容的にも過渡

期のもので、その編集は改良の余地があった。井筒屋庄八による明和6年に出版された『大和名所記』が外題に「外ニ無類」と称するだけあって、それまでに積み上げた小型案内記の集大成であることには間違いない。大和国内の名所を案内する小型案内記は明和6版を最後に絵図屋庄八でも出版されることは無かった。ただ、刊記等を変えずに改版されていた可能性も皆無ではない。

安永3年(1774)に『改正絵入南都名所記』が井筒屋庄八から絵図屋庄八に屋号を変えた書肆から出版される。南都名所案内はこの『改正絵入南都名所記』を完成形として幕末まではほとんど内容・レイアウトも変えずに出版されるが、その版は安永3年版を含め8種類出た。『改正絵入南都名所記』最大の特徴である挿絵や内容の精査は他稿を期したい。この稿は『改正絵入南都名所記』の前史として奈良に於ける小型案内記の系譜化を試みた。

江戸時代中期 小型案内記 『南都名所記』・『大和名所記』成立の系譜

小型案内記『南都名所記』の系譜

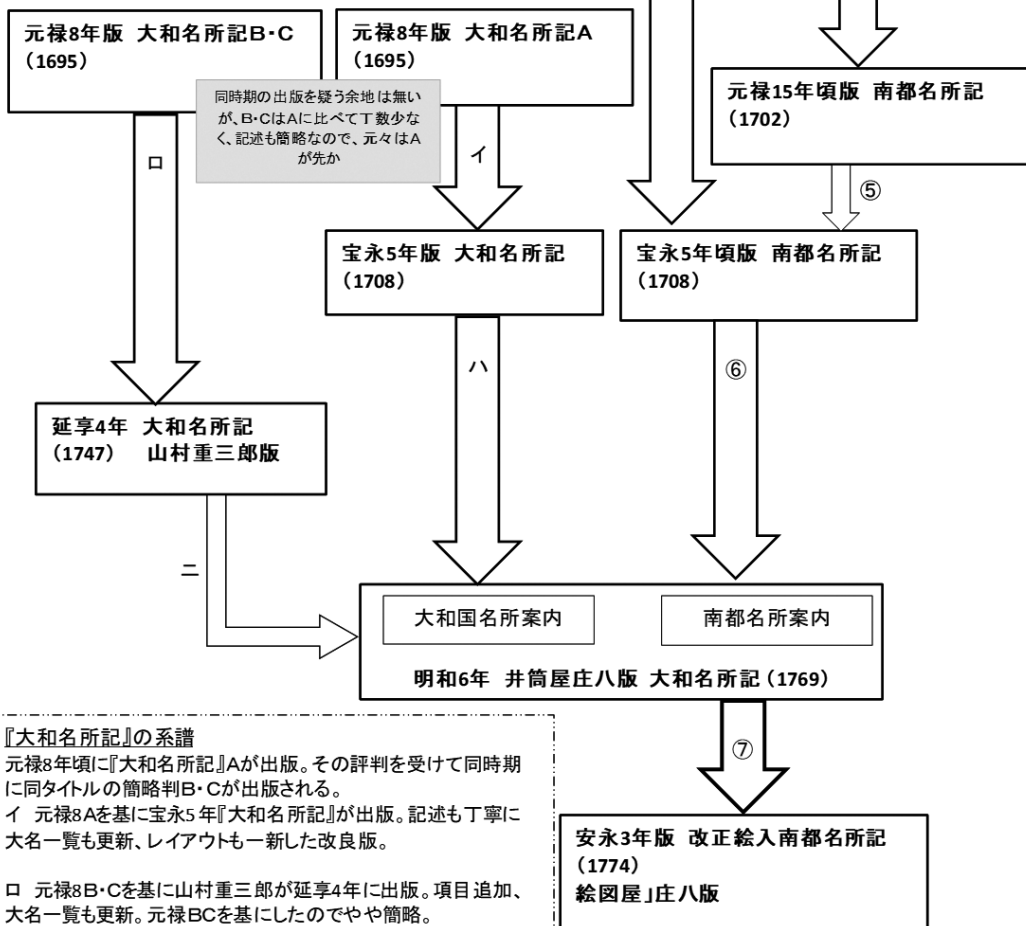
①『京童』の評判に触発されて寛文7年に何某が『南都名所記』を書いたが出版には至らず。原本を享保15年に書写して今に残る。

②『南都名所記』の編集上のアイデアを取り入れて初めて本格的な小型案内記『南都名所道筋記』が出版。

③急激な需要増に対応するために『南都名所道筋記』の短縮・簡略判を『南都名所記』として元禄15年頃に出版。

④⑤『南都名所道筋記』を忠実に写しつつ元禄15年版のレイアウトを採用した本格的な小型案内記の第二弾が宝永5年に出版。

⑥宝永5年『南都名所記』の文章をほぼ取り入れて、さらに新しい情報を加えた井筒屋庄八出版の『大和名所記』の前半南都名所案内登場。後の『改正絵入南都名所記』のひな型になる。



『大和名所記』の系譜

元禄8年頃に『大和名所記』Aが出版。その評判を受けて同時期に同タイトルの簡略判B・Cが出版される。

イ 元禄8Aを基に宝永5年『大和名所記』が出版。記述も丁寧に大名一覧も更新、レイアウトも一新した改良版。

ロ 元禄8B・Cを基に山村重三郎が延享4年に出版。項目追加、大名一覧も更新。元禄BCを基にしたのでやや簡略。

ハニ 宝永5版を基に井筒屋庄八出版の『大和名所記』の後半大和国名所案内登場。内容は宝永5版だが大名一覧は延享4版をそのまま転載している。

図7 小型案内記の系譜図 筆者作成

〔注釈〕

- 1) 山近博義「近世奈良の都市図と案内記類」（『奈良女子大学地理学研究報告』V、1995）。
- 2) 水江漣子「江戸の案内記」西山松之助編『江戸町人の研究』第三卷（吉川弘文館、1974）所収。
- 3) 山田浩之「近世大和の参詣文化」（『神道宗教』146号、1992）。
- 4) 吉海直人の名所記及び絵図屋庄八についての論考は以下の通り
 「『絵図屋庄八』について」（『同志社女子大学学術研究年報』4号、1992）、〈絵図屋関係出版物一覧〉所収。
 「『絵図屋庄八』追考」（『同志社女子大学総合文化研究所紀要』14号、1997）、〈絵図屋関係出版物一覧・増補分〉所収。
 「『大和名所記』二種・『南都名所記』一種の影印と解題」（『同志社女子大学日本語日本文学』11号、1999）。
 「『南都名所道筋記』の影印と解題」（『同志社女子大学日本語日本文学』14号、2002）。
 「異版『大和名所記』・『南都名所記』の影印と解題」（『同志社女子大学日本語日本文学』20号、2008）。
- 5) この増補により筒井家最後の出版物は昭和18年1月刊の『奈良名勝全図』（一枚物）であることが判明した。
- 6) 初期の基礎的な研究として
 和田万吉『古版地誌解題』（1916）、
 平井良朋「近世奈良地誌小考」一〜四（『大和文化研究』第9巻8号11号、1964）、（第11巻11号、1966）、（第13巻12号、1968）。
 平井良朋「汎大和近世地誌小考」一・二（『大和文化研究』第14巻6号9号、1969）。
 がある。
- 7) 1997〜98年にかけて奈良市教育委員会が絵図屋庄八こと筒井家の史料の悉皆調査を行った。その成果は『奈良市歴史資料調査報告書』14筒井家史料版本銅板1997。同15筒井家史料 記録1998、にまとめられている。
- 8) 現在、この写本の外に『南都記雅昵』という書名の写本が早稲田大学図書館千崖文庫、宮内庁書陵部、西尾市岩瀬文庫に所蔵されている。その内、宮内庁書陵部蔵本・岩瀬文庫蔵本は画像データが公開されており瞥見すると、この国会図書館蔵の『南都

名所記』と同じもののようである。しかし、どの写本がオリジナルか、最も古いものかなどの精査は出来ていない。

- 9) 国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2540217>
- 10) 古典籍総合データベース
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko24/bunko24_a0951/index.html
- 11) 「『大和名所記』二種・『南都名所記』一種の影印と解題」に解題と影印掲載。
- 12) 「『南都名所道筋記』の影印と解題」72頁14行目。
- 13) この部分は平岡定海「江戸時代における東大寺大仏殿の再興について」（『南都仏教』第24号、1970）を参照。
- 14) 「異版『大和名所記』・『南都名所記』の影印と解題」に解題と影印掲載。
- 15) 同論文三五頁上段一五行目。
- 16) 古典籍データベースより②元禄8B
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko24/bunko24_a0964/index.html
 ④宝永5版
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko24/bunko24_a0963/index.html
 ⑤延享4版
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko24/bunko24_a0962/index.html
 ⑥明和6版
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru03/ru03_03617_0081/index.html

〔図版出典〕

- 図1、2: 早稲田大学古典籍総合データベース『南都名所記』文庫24A948 1、21。
- 図3: 国会図書館デジタルコレクション『南都名所記』
[info:ndljp/pid/2540217](https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2540217)
- 図4、5: 吉海直人「異版『大和名所記』・『南都名所記』の影印と解題」（『同志社女子大学日本語日本文学』20号、2008）80頁。
- 図6: 早稲田大学古典籍総合データベース『大和名所記』
 ル03_03617_0081 1。
- 図7: 筆者作成。